

褒めるために叱る

園長 日高 好治

子どもを育てる際によく耳にするのが「叱り方が難しい」ということです。近頃、世の中全体が甘くなりつつあると言われていています。もちろん、子どもの心に寄り添いながら子どもの心を傷つけないよう指導することは大切です。しかし、子どもが乗り越えるべき壁を大人がちゃんと作ってあげることも大切なことだと思います。「やさしいけど怒るとこわいぞ」「厳しいけど楽しいな」と思ってくれるようになったら最高です。

以前、臨床心理士の講演を聴く機会があり、そこでの言葉が今でも心に残っています。「かわいい子を厳しく叱るといのはいやなものです。だからこそ、つつい甘やかしてしまうことがあります。この様に考えたらどうでしょう。褒めるために叱るのです。」

つまり、子どもと頑張る目標(おかたづけ、食べ物の好き嫌い、友だち関係等)を共有し、その目標に向かって頑張る過程において、努力の足りなさや、情けない言動を見たり、聞いたりした時は、叱る必要があると言うことです。「この子が、この目標を達成した時に褒めるために、今は叱る。」そういうことであつたかと思えます。

もちろん、幼児期は大人から愛情を注がれることが大前提です。その上で、発達段階やその子に合わせて少しずつ乗り越えるべき壁を作ってあげることが大事だと思います。



【保育信条：尊いみ教を聞いて ほとけの子を育てます】

7月の主題

照育(しょういく)=おそだて

太陽の光を受け草木が力強く伸びていくように、光は生きとし生けるものを育てる力の源であります。

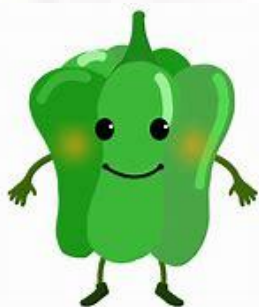
同じように、人が育っていくためにも、やはり光が必要です。それは、太陽の光はもちろんですが、眼には見えない光、つまり心を育てる光です。仏さまは、心の闇を晴らす尊い光で私たち一人ひとりを照らして、人間としての心を育ててください。「心を写す鏡」とも例えられたりもします。子どもたちは園で仏さまの話の聞いたり、動植物を育てる体験などを通して、いのちの不思議さに目覚めたり、育てることを通して自らも育てられていることに気付いていくようです。

今月は仏さまの光に照らされて、共に育ち合えるような保育を目指したいと思います。



園児とのふれあいを通して

幼稚園での生活の中で、園児とのふれあいの一こまをお伝えします。



園内で栽培しているピーマンを使ったメニューが給食で提供された日のことです。給食の後、男児がやってきて「園長先生、ぼく頑張ってピーマン食べたよ。」と教えてくれました。また、担任の話によると、普段ピーマンが食べられない園児も少しだけ食べていたとのこと。自分たちがかかわったピーマンだから頑張って食べようとしたんだなあと感じました。

食育を通して子どもたちに育まれるもの

園では、食育を通して子どもたちに次のような姿に育つことを目指しています。

- ① おなかがすくりズムがもてる。
- ② 食べたいもの、好きなものが増える。
- ③ 家族や仲間と一緒に食べる楽しさを味わう。
- ④ 栽培、収穫、調理を通して、食べ物に触れ始める。
- ⑤ 食べ物や身体のことを話題にする。



以上5つの項目が幼児期の食育目標とされています。

また、芋植え、芋ほり、みかん狩り、田植え、稲刈りなど、園では食べ物に触れる機会があります。一番食育に良いのは、自分で育てて収穫し、調理をする段階まで一通り行うこと。食べ物を育てることの大変さ、収穫した時の喜び、調理をしてもらえるありがたさ、全てを身を以て体験することができるからです。プランターや畑がなくても、人参や大根の葉を器で育ててお味噌汁に入れたり、貝割れ大根や豆苗を再収穫したりと、家庭でも栽培と収穫、調理の体験は手軽にできますよ。

今、園では地域の方のご協力により、さつまいもとお米を栽培しています。また、園庭にも数々の野菜を育てており、実った野菜は給食の材料として使われています。

園庭でも野菜が少しずつ実っています



ミニトマト



ナス



ピーマン

